

明治期・大正期の生徒数（その1）
～「相中相高八十年」「相中相高百年史」より～

1 明治期の生徒在籍数と卒業生

卒業した者は40%弱

本校は、創立当初のころ生徒募集に力を注いでいた。優秀な生徒を集めることも大事であったが、一定の生徒を集めることも同時に要求されていた。

校歌（当初）に「同窓五百」とあるように、当時の本校の生徒定員は五学年を通して五百名というようになっていた。

ところが、「この学年（三学年）の終り頃までに中途退学が続いた。これは卒業を待ち切れないで小学校の補習的に見た家庭の考え方で退学」（第11回生、鎌田安^{註1}）させたとか、「明治39年の大凶作の年には同級生の半数にあたる50人が一度に退学した」（第八回生、斎藤正^{註2}）とかという事態になると、「学校でも困り果て再募集、特別教育を行って一挙二年に入れて補った」（斎藤正）り、「学校長自ら各小学校を巡訪して生徒を集め」（第八回生、佐藤信義^{註3}）なければならなかった。

特に、日露戦争が行われていた1904、1905年には、東北地方は凶作に見舞われ収穫が皆無に近い状態だったので、生徒の定員を満たすことが困難であった。1904年入学の渡辺宗重^{註4}は次のように書いている。

僕らは相中第七回目の入学者として入ったわけだが、その前に入学試験があるというので、第一日には皆その覚悟で学校に行ったわけであった。処が欠席者があって定員に満たなかったのか、試験が中止になって、当日の出席者全員が入学許可となり、一同安心の態であった。之が相中に関する最初の印象として残っている。最初の入学人員は149人であった。
(『相高新聞』)

この翌年入学の第八回生は、入学生125名、卒業生48名^{註5}と、ともに相中史上最小値であった。

(註1) 中村出身

(註2) 大熊出身 (旧姓 末永)

(註3) 山上出身

(註4) 中村出身

(註5) 馬城会会員名簿では49名となっている。

なお、年度別在籍生徒数と卒業生数及び退学生徒数は、次のようになっている。

表 I - 22 年度別在籍生徒数と卒業生数（在籍は学年始めの数）

年 度	第一学年	第二学年	第三学年	第四学年	第五学年	計	卒業生
一八九八年	一六二	一一〇	七五	六四	六一	一六二	五五
一八九九年	一五五	一一九	七五	六二	六一	一六二	五五
一九〇〇年	一三八	一一九	七五	六二	六一	一六二	五五
一九〇一年	一四八	一一五	九四	六四	四二〇	四二〇	五五
一九〇二年	一五三	一一五	九八	六二	四八九	四八九	五五
一九〇三年	一五七	一一五	八八	七一	四八七	四八七	五五
一九〇四年	一四九	一〇七	七九	七一	四七一	四七一	六〇
一九〇五年	一二五	一一二	八三	七二	四四一	四四一	五四
一九〇六年	一四二	九九	九二	七二	四六一	四六一	四九
一九〇七年	一四四	一〇九	七八	六九	四六一	四六一	六〇
一九〇八年	一四六	一二五	七二	七一	四七四	四七四	五九
一九〇九年	一四九	一一五	九九	六七	四八六	四八六	四八
一九一〇年	一二八	一〇四	一〇七	八一	四七七	四七七	五六
一九一一年	一一九	一一〇	九三	八九	四八七	四八七	七四
一九一二年	一三二	九九	九二	八一	四七八	四七八	七〇

表 I - 23 年度別退学生徒数

年 度	在 籍	退 学	百分比率
一八九八年	一六二	二八	一六・〇
一八九九年	二六七	八一	三〇・三
一九〇〇年	三一三	四二	一三・七
一九〇一年	四一〇	九五	二三・一
一九〇二年	四八九	一〇〇	二〇・四
一九〇三年	四八七	九二	一八・八
一九〇四年	四九四	一〇九	二二・〇
一九〇五年	四五五	九六	二一・〇
一九〇六年	四六一	八七	一八・八
一九〇七年	四六一	六六	一四・三
一九〇八年	四九三	六八	一五・八
一九〇九年	四九六	七九	一五・九
一九一〇年	四九四	六一	一二・〇
一九一一年	四九九	八六	一七・二
一九一二年	四八三	七七	一五・九